

【用語】 巢鷹—巢のなかの雛鷹 巢おろし—鷹の雛を捕らえること
かいわり—卵殻が割れて雛がかえること 鶺—ワシタカ科の鳥、鷹よ
りも小さく鷹狩りに用いた 大笹村—吾妻郡孀恋村 御巢鷹見—山々
を巡回して巢鷹発見や人が近づかないよう監視する役 註進—注進、
事変を報告すること 甘葉郡檜原村—多野郡上野村

【解説】 神流川かんながわ最上流域の山中領上山郷かみやまごう一带は、鷹の営巢に適した深山幽谷の地であった。このため、幕府は江戸時代初期から地域内の山々を御巢鷹山に指定し、関係者以外の入山を厳しく禁止した。山中領の御巢鷹山は享保年間には三六カ所にのぼり、上野国内では最も集中していた地域であった。この山々は幕府の御留山おとめやまであるため、その管理は幕府から任せられた御巢鷹見衆（鷹見役）とその下役が担当した。彼らは山々を巡回して巢鷹の発見と保護に努める一方、雛鷹を適当な時期に巢下ろしして幕府へ献上したのである。

この文書は、享保七年（一七三二）浜平・野栗沢村などの御巢鷹見一七人が吾妻郡大笹村の御巢鷹見の所へ出張し、雛鷹の巢下ろしや飼育の方法を学んできた時の報告書である。これによれば、巢下ろしの時期は雛になってから二〇日前後が最適であること、雛鷹の餌は一日に雀六、七羽を三回に分けて与えること、ほかに鶺と児鶺の見分け方などについて記されている。この文書から巢下ろしの時期の決定や飼育方法などには長い経験と日頃からの研修が必要であったことが想像される。なお、巢下ろしした雛鷹は幕府へ献上されたが、その飼育・訓練場あるいは餌を確保する場所が御巢鷹捉飼場おたからえかいばである。